

「具体⇄抽象」PJ 報告⑨プロジェクトの成果

企業経営漫談士 岡野実空

プロジェクト総括の前半は、その当初の目的に対する成果のまとめ。それはこの報告の初回に挙げた、「マネジメントとイノベーション」、そのための「情報共有と相乗効果」、そしてそれを担う「個人と組織」という、3種の「二兎」の追究から得られた以下の知見です。

その1: 「マネジメント」と「イノベーション」

今回のプロジェクトにおけるこの二者の区別は、「時間軸」によるもの。すなわち社会や顧客の現在のニーズに応える「マネジメント」に対し、将来のニーズに対応しようとするのが「イノベーション」です。また本来の「マネジメント」は双方を含むものですが、それらを明確に分離しない限り、長期どころか中期の視野も忘れがちになるのが、いつの時代も多くの組織人の実情だからです。

コロナ禍における今プロジェクトの意義の第一は、後手に回っている後者、すなわちそれ以前とは異なる、「コロナ後」のニーズの洞察とそれに対応する試行錯誤が、あらゆる組織にとって急務であること、そしてその核となるのが、「具体⇄抽象」能力であることの明確な確認でした。

その2: 「情報共有」と「相乗効果」

次に今プロジェクトが明らかにしたのは、情報の「空間的」な広がりがある能力次第であること。すなわち従来のタテ(上下)に加え、ヨコ(左右)の情報流通は、従来の組織の枠を超えたナナメの交流も可能にし、社会のさまざまなニーズへの柔軟な対応を可能にすることです。

かつてそれを一手に担っていたのは、各社のケイレツ。そこでは、自社や関連会社、および自業界の「方言」によるコミュニケーションが行われていました。しかし ICT と高速ロジスティクスが発達による社会のシステム化はその限界を明らかにし、デジタル革命がそれに引導を渡しました。

またその後のグローバル化を加速したのは、前回までのコラムで報告したように、経営や事業に関わる「共通語」や「フレームワーク」、そしてそれをういた「情報共有」と「相乗効果」でした。

そしていまコロナ禍は、経済偏重がもたらしたグローバル化の弊害やリスクを明示し、私たちに「具体⇄抽象」能力を発揮する目的や領域の再考を強く求めています。

『三々な経営』

- 1-1 「大変」な時代
- 1-2 「グローバル化」を考える
- 1-3 「システム化」を考える
- 1-4 「IT・デジタル化」を考える
- E-26 平成を振り返る①企業経営

その3: 「個人」と「組織」

さて3番目の「二兎」は、最も根が深い問題です。それは「具体⇄抽象」能力に長けた人間の一部が惹き起こしている、さまざまな格差や分断。特にその有能な参謀となる人工知能は、ロボットを進化させたばかりでなく、頭脳労働の領域にも進出して多くの雇用を奪い、それによって得られる利益の独占や寡占を可能にしています。

しかし幸いなことに、私たちの思考や行動は、「個人」より「組織」、すなわち他人との「関係性」を重んじる傾向をいまだに色濃く残しています。今プロジェクトが検討したように、そこでは「具体⇄抽象」能力に長けた人間が他のメンバーを介助し、個々の「知識」を統合して集団で「知恵」を生み、その成果を公平に分配することが可能です。

今回のプロジェクトをつうじて見えたものは、私たちがコロナ後を生きるための必須条件でした。すなわち各々の左側にある、「マネジメント」「情報共有」「個人」の3つは、その基礎となる「必要条件」。そして右側が、その上に乗る「イノベーション」「相乗効果」「組織」という「十分条件」です。

私たちは今回、皆さまのご協力を得て、「マネジメント=コミュニケーション」の「具体⇄抽象」能力という心柱を立てることができました。また今後も「イノベーション」の触媒となるべく、皆さまとの対話をつうじた「共育」に励みますので、倍旧のご支援をよろしく願いいたします。

2021年11月29日 実空